

神皮を楽しもう

鎌田英明



早いもので、私が会長に就任してもう1年が過ぎようとしています。

この間も神奈川県皮膚科医会は澄んだ川の流れのごとく、決して澱むこともなく前進し続けています。これは何も自分が会長として優秀だと誇示している訳ではなく、神皮の仲間たちがきちんと各自の置かれた持ち場を心得て、やるべき以上のことをやっている証しだと私は思っています。しかも、そこにはなんらの報酬や栄誉があるわけでもなく、ほとんどボランティア活動です。私自身は今のところ伴走するだけの存在で、決して先頭で旗を振っているわけでもなく、みんなの快走に頭が下がる思いでいます。

幹事長だった頃に、家内に「結局なんだかんだ言いながらも、好きだからこんなに毎日のように出かけて行けるのよね。」と、半分あきらめ顔で言われたことがあります。もしかすると、あちらこちらにそういうあきらめ顔の奥様やご主人がいらっしゃるのかもしれませんが、何かの本で読んだことがあります。マグロは泳ぎをやめると酸素不足になって死んでしまうと言います。もしかしたら我々はマグロの群れと同じなのかも知れないと思ってみたりします。たまに何もしなくても良いはずの休暇があっても、なんとなくお尻がおちつかなく、やはり泳ぐことをやめない。病気でしょうか？いや、忙しいとか、大変だとか言いつつも、実は皆どこかに楽しんでいる気持ちがあるのではないのでしょうか。

明年4月26、27日には、栗原顧問が会頭を務められる第30回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会が、みなとみらいのパシフィコ会議場で開催されます。神奈川県皮膚科医会としても学会を成功させるべく、全面的に協力したいと考えています。みんなの力を結集して実りある会にしましょう。

大会のメインテーマは「日臨皮30年 皮膚科を

楽しもう」と決まりました。実行委員も決まり、それぞれに動き出しています。ここでもデューティーだからということではなく、メインテーマにあるように自らが企画や運営を楽しみながら、参加者にとっても楽しい学会にしていきたいという気運にあふれているように見受けられます。

以下は、陶芸家、書家、そして美食家として知られる北大路魯山人の遺した文章の一節です。会長就任当初、どんな新機軸を打ち出したら良いのか、私らしさとは何かなどとそれなりにプレッシャーを感じる毎日でしたが、そんな折に島根の足立美術館を訪れ、きれいに整った庭園や横山大観の絵画と同じくらいに印象に残った言葉です。ほかでも使わせていただいた文章ですが、神皮にも載せさせていただくことをご容赦ください。

「努力といっても私のは遊ぶ努力である。私は世間のみなが働き過ぎと思う一人である。私は世間の人になぜもっと遊ばないかと思っている。画でも字でも、茶事でも雅事でも遊んでよいことにまで世間は働いている。何でもよいから自分の仕事に遊ぶ人が出てこないものかと私は待望している。政治でも実業でも遊ぶ心があって余裕があると思うのである。」

この魯山人の言葉は我々が活動していくうえで示唆に富む言葉ではないかと思っています。楽しくないところに人は集まってこないでしょうし、楽しくないことを人は続けていけないものです。もしかすると、私がわざわざ言うまでもなく、神皮のみんなは既にこの言葉を無意識のうちに実践しているのかもしれない。